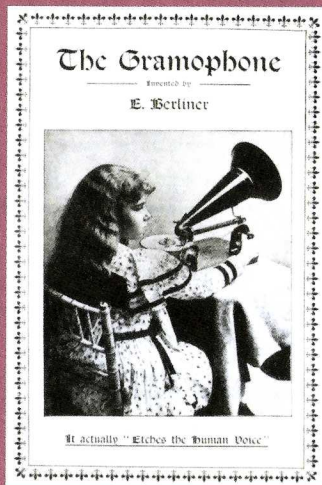


特集

レコード

レコードは、エジソンとベルリナーの発明以来、技術開発と素材発掘の競争のなかで、おおくの魅力あるジャンルを世に送り出してきた。録音された音を聴くという習慣を身につけた日本人は、「映画説明」をレコードで聴くという不思議なジャンルも生み出した。二〇世紀の音楽文化の原動力となったレコードの歩みを振り返ってみたい。



グラモフォンの広告(1896年)



レコードが 発展させた音楽文化

福岡 正太
(ふくおか しょうた)

本館文化資源研究センター

レコード発明の意味

レコードは、一九八〇年代にはほぼCDにとつてかわられ、今では触れたこともない人が増えている。しかし、ある世代から上の人びとにとつて、レコードは音楽そのものだった。音楽を好きだということ、あるいは特定の歌手や音楽家のファンだということは、レコードをもってあることと同義だった。多くの人がレコードを買い、レコードをとおして音楽を聴くことで、そこに録音された音楽を Exhibiting 展させてきた。

二〇世紀前半、録音再生技術の発展とレコードの普及は、音楽のあり方を大きく変えた。音楽は、レコードという商品として流通するようになり、少数のパトロンや特定の共同体に属する人びとに支

えられてきた音楽は、レコードを買う不特定多数の人びとのために演奏され録音されるようになった。人びとは、自分のものとなったレコードにより、何回も繰り返し同じ演奏を聴いた。同時に、次々と違う新しい音楽を自分のものとしたくなった。このようにして、新しい音楽が次々と生み出され、伝統的な音楽も大きく変化した。

外地録音と 東アジアの音楽文化

東アジアでは、各地を支配下におさめた日本のレコード会社が、音楽産業と音楽の展開に大きな影響をおよぼした。日本の大手レコード会社だった日本コロムビア株式会社の場合、ソウル、台北、上海、ハルビン等に支社や子会社をかまえ、現地社会に向けてレコードを作り流通させた。これらのプレスは、本社川崎工場でおこなったため、レコード原盤が日本に残され、現在、民博に所蔵されている。そこには、民俗的な音楽、古典的な音楽、西洋芸術音楽、流行音楽など、幅広い音楽が録音され、当時の音楽文化研究の重要な資料となっている。

返られることがなかった。本社の人間は、中身にかかわっていないため忘れたのだらうか。だとすれば、レコードプレス自体は本社に頼んだものの、外地録音は、ある程度、自律的に制作されていたことを想像させる。政治経済的には、一方的な支配を受けながら、音楽的には、ある程度の自律性をもって自分たちの表現を発展させてきたのだらうか。

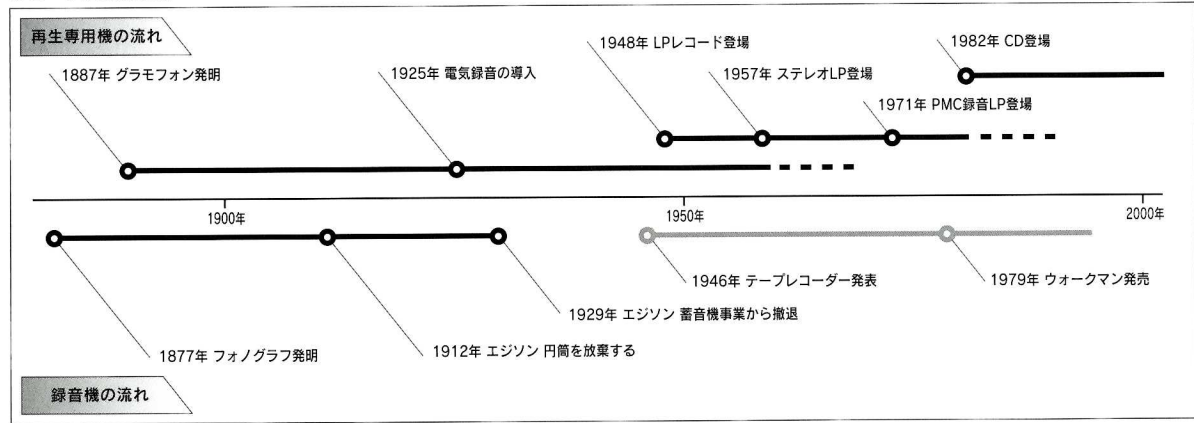
一方で、よく資料を見ると、特に流行音楽の作曲や編曲、伴奏などに、しばしば日本人の音楽家がかかわっていたことがわかる。欧米の流行を取り入れた音楽

については、まだ各地に専門家が少なかったのだらう。その点において、東アジアの音楽家たちは、そうとはあまり意識せずに、交流しながらその技を磨いていったのかもしれない。

インターネットから音楽をダウンロードすることが当たり前になりつつある今日、レコードは忘れ去られようとしている。しかし、レコードとともにわたしたちがどのように音楽文化を発展させてきたのかを振り返ってみることは、今後の音楽文化を展望するうえでも必要なことではないだろうか。



民博が所蔵するレコード原盤。
日本の統治下におかれた中国、台湾、朝鮮に向けて作られた



円筒と円盤の攻防

坂野 博之
(さかの ひろゆき)
音楽学者

誕生と競合

一八七七年のクリスマス・イヴに、ある装置の特許がアメリカで申請された。フォノグラフと命名されたこの装置は、スズ箔を巻き付けた円筒を手でまわし、そこに針で音溝を刻みつけて音声（おとごゑ）を記録することができた。開発者は『発明王』エジソンである。蓄音機とレコードがこうして誕生した。

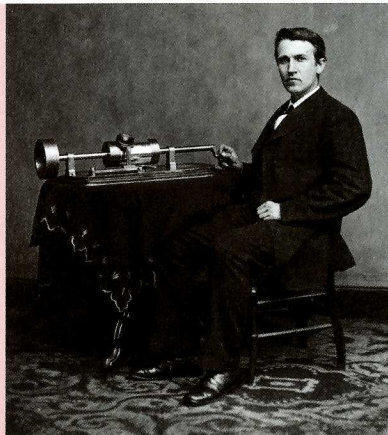
その後フォノグラフは改良され、記録媒体に硬質蠟を用いた改良型フォノグラフが一八八八年に完成する。これがいわゆる口ウ管式蓄音機とよばれるものである。

ところが、レコードの誕生にはもうひとつの別な系譜があった。フォノグラフが改良されていた最中、同じアメリカでベルリナーが一八八七年に「グラモフォン」を考

縦と横

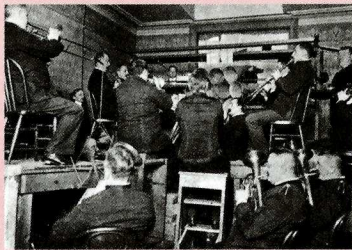
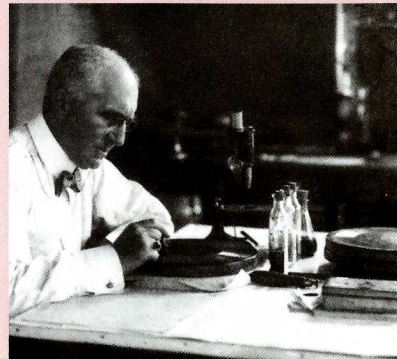
案した。フォノグラフの発明からちょうど一〇年後のことである。

フォノグラフとグラモフォンとはその録音方式が異なっていた。記録媒体に対して、フォノグラフ方式は音溝を垂直方向に刻み（縦振動）、グラモフォン方式

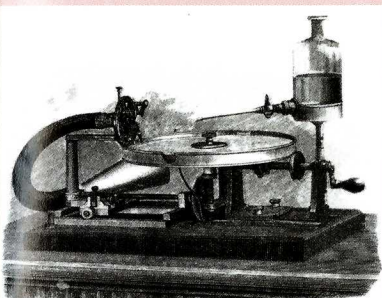


エジソンとフォノグラフ(1878年4月)

研究所におけるベルリナー(1920年代)



複数台のフォノグラフによる繰り返し録音



最初期の平円盤用の録音システム

マルチホーンによるパデレフスキの録音(1911年 右奥ガイズバーク)



コルカタにおけるゴオハル・ジャンの録音風景



取り、それをもとにしてプレスすれば、一回の録音で効率よく大量に複製が作れた。ところが円筒は容易に型が取れないため、複数の円筒を作るには同じ演奏を繰り返し何度か録音する必要があった。

タイトルの充実

ベルリナーは自ら一八九五年にベルリナー・グラモフォン社を設立して本格的な事業展開をおこなった。エジソンも一八九六年にナショナル・フォノグラフ社を設立し、さらにヨーロップへと進出した。ベルリナーも少し遅れてヨーロップへと進出する。そのヨーロップ本社とも言うべき英グラモフォン社(現在のEM

は音溝を水平方向に刻んだ(横振動)。つまり再生時に、フォノグラフの針は上下し、グラモフォンの針は左右に動いた。

しかし両者の決定的な違いは、そのレコードのかたちである。フォノグラフ用のレコードは円筒型で、長さが四インチあり二分間再生できた。一方、グラモフォン用のレコードは平円盤で、最初期は直径が五インチ(一二・七センチメートル)。

録音と複製

商品として録音された最初の円筒は一八八九年にノース・アメリカン・フォノグラフ社から発売された。一方、グラモフォンとそのレコードはドイツの玩具会社ケンメラー&ラインハルト社から一八九〇年に販売された。

当時の録音はマイクロフォンを用いなかった。録音の過程で電氣的な増幅は一切なく、空気の振動をそのまま音溝に刻んだ。そのため録音スタジオにはマイクロフォンの代わりに大きな集音ホーン(ラッパ)が設置されていた。そのホーンの末端には振動板と針が取り付けられ、空気の振動を受けて針が動き、記録媒体を削り取って音溝を刻んだ。演奏者は録音の際、この集音ホーンに向かって音を吹き込んだことから、現在でも録音することを「吹込み」とよぶ。

円盤の場合、録音された原盤から型を

そろった録音カタログは円盤の人気をさらに高めたのである。

攻防の終焉とその後

二〇世紀に入り両面盤のレコードが発売されると、円盤と円筒の人気の差は急速に広がった。これに対抗して、録音機能を省いてフォノグラフをプレイヤー化し、円筒の大量複製を実現したが、結局エジソンは一九二二年に円筒を放棄して縦振動方式の円盤制作へと転換する。しかしそのエジソンも一九二九年、ついに蓄音機事業から撤退し、一九世紀末からおよそ四〇年も続いた録音方式の競合はここに幕を閉じる。

ところが、エジソンがそもそも思っていた、録音してそれを再生する、というフォノグラフの基本構想は、その後テープレコーダーに継承され、エジソンの撤退から半世紀を経て携帯用小型カセットとして復活する。

一方、円盤レコードの制作現場では一九二五年からマイクロフォンの用いた電気録音技術が導入される。それまで歌手や器楽の演奏が中心だったジャンルに管弦楽のレパートリーが数多く加わり、レコードの新時代への幕が開いていった。

特集 レコード

レコードになった「映画説明」

今田 健太郎
(いまだ けんたろう)

京都市立芸術大学特別研究員

実演をもとに

日本におけるレコードの歴史をながめてみると、「映画説明」という不思議な名前のジャンルを目にする。現在であれば、映画というものは映像と音声を総合した複製技術であり、そのまま楽しむのが普通である。その内容を抜き出して語るといふ行為が録音に値するとは考えにくいだろう。しかし、レコードという音声の複製技術とそれと向き合った芸能の関係を考えよとすると、きわめて重要な示唆を与えてくれる。

映画説明とはもともと実演するパフォーマーであった。映画には、現在のそのような録音された音声をとまなうトーカー(発声)になる以前に、音声を実演で補う無声映画の時代があった。日本にお

いては、こうした、映像にしたがってその内容を解説したり、声真似をしてせりふを入れたりする実演を「映画説明」あるいは「声色」といい、それをおこなう芸能者を「活動写真弁士(略して弁士あるいはカツベン)」「映画解説者」とよんだ。一九〇〇年代から一九三〇年代にかけて、無声映画は日本全国において急速に普及する。映画館は各地の芝居小屋にとつてかわり、映画説明の弁士たちは落語や浪花節の語り手をおしのけて大衆娯楽の花形となった。映画説明の実演そのものも、人気のあつた浪花節や流行歌などとともに、当時普及しつつあつたレコードに、多数吹き込まれることになるのである。

型のないパフォーマンス

ところで映画説明は、実演するパフォーマンスとはいえ、従来の芸能とはまったく異なるところがある。それは、決まったかたちや演目をもっていないということだ。従来の芸能は、それぞれのジャンルごとに独特のパフォーマンスのかたちが確立されているため、それを見たり聞いたりすることでその芸能を特定できる。たとえば、落語には落語に特徴的な身体動作、音声、演目、舞台演出があるし、講談にしても浪花節にしても然りである。それに対して、映画説明とい

トーカーさえも映画説明!?

さて、本題に戻ろう。この、いわば「なんでもあり」の映画説明がレコードに吹き込まれそれが後世にまで残ると何がおこるのだろうか?この実演が存在していた時代には、映画説明レコードは、他の語り芸や演劇とは区別された、ひとつのジャンルとして認識されていたことはおそらく間違いない。レコードのラベルもそのように記されているし、レコードに吹き込んだのは有名弁士たちであり、演目も映画のタイトルをそのままもっている。当時の人びとなら、映画説明という実演をもとにした録音であることとをたやすく想像できたろう。

パフォーマンスは、極端にいえば、映画を上映にしたがつて説明する語りであれば、何をやっても映画説明となるのである。



▲花井秀雄(大勝館) お酒のあとではきつ踊りが出る。シメミツとした清元にあはせて、あの長い手と足で踊るところは、まことに結構で、思入も、平聲くとのこと。一番好きな者は天鼓で、お辨當には天鼓の太鼓を、目も魅いたことない。
▲染井三郎(帝國館) 踊はなんでも上手、あまりお酒はいけませんが、酔つて少し心持ちがよくならず、口三味で必ず踊る。時々はお酒の酔子をおっことある時。一番好きなものは、おっこと、いつもおんなの香のよいこと。
▲西村英天(天鼓座) 酒が第一の好物。病氣のあとだから今は餘裕つ、しんで居るのだが、それでも時々酔つては、一杯飲んだ。

▲加藤貞利(大に座) 貞利の癖は、酒は清元がよいことだ。大きい聲で、眼をみつけて歌ひ出すところは、大勝館だ。お嬢子が一番好き、みくに座の辯士室には有平の惚えたこと。
▲林天風(帝國館) 流行節をやるのが一番上手。流行節を知つて居るのは、辯士界、等しい。洋食が好き、ことにカツレツと茶は切つて、おんなの香のよいこと。
▲石井春波(キネマ) あの聲で、しかも清元をやるのだから、これこそ、お嬢子の眼が、知らず、酒がすすき、酒の中で、洋酒、洋酒の中で、ビールが一番と嗜む。



▲南井英光(帝國館) 踊は、おんなの香のよいこと。これは、どう言つても、お嬢子の眼が、知らず、酒がすすき、酒の中で、洋酒、洋酒の中で、ビールが一番と嗜む。
▲土屋松葉(オベラ館) 追分節は舞臺でよく聞かへつて、お手に、おんなの香のよいこと。おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。
▲黒澤松葉(帝國館) あれで踊るのだから、合點が行かない。踊の、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。
▲紫野柳(遊樂館) 役者になつた人だから、三味線も踊りも、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。
▲大久保天来(天鼓座) お酒は、中々上手だ。あの聲で、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。
▲島田漢月(東京俱樂部) 常盤津が一番上手だ。家に歸つてからは、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。
▲河邊紫水(帝國館) 踊ることは、天下一品だ。長く、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと、おんなの香のよいこと。

(写真1)『活動之世界』第5号(大正5年5月)より

レコード



(写真2)映画説明「船頭可愛いや(一)」弁士 泉詩郎

しかし、すでに述べたように、映画説明は確固としたパフォーマンスのかたちをもたない。それゆえか、映画説明レコードの録音は、実演の実態から離れてしまい、現在でいえばラジオドラマや歌謡ショーの司会者による前説のような、音声で完結するまとまった語り志向するようになる。そのような工夫は、すでに無声映画の時代にはじまっていたが、映画のトーカー化によって弁士という生業がなりたたなくなり、さらに拍車がかつたようだ。つまり、実演としての映画説明という背景が失われたため、録音のみで完結せざるをえなくなったのである。

そうした映画説明レコードで代表的なのは、泉詩郎という弁士である。彼はトーカー化の後でも人気を保つた数少ない弁士であるが、驚くべきことにトーカー映画の映画説明レコード(一)を多数残している。写真を見てほしい(写真2)。このラベルには「松竹蒲田オールトーカー」とあるとおり、この映画説明がすでに無声映画のものではないことがわかる。「船頭可愛いや」はもともと流行歌であり、この映画はそれを主題歌として劇中に登場させるべく製作された。だが、それをもとにしたこのレコードの売りは、映画の梗概や主題歌もさることながら、泉詩郎という弁士の話芸であることが、このラベルから見てとれるだろう。